

# 『言語と文化』創刊号に寄せて

言語文化教育研究センター長 小 田 基

岩手県立大学の発足、そして言語文化教育研究センターの発足からさほど長い日々を経ずして、言語文化教育センター研究紀要『言語と文化』の創刊の運びに至ったことを同僚ともども喜びたい。同僚各位の研究に向ける熱意の表れにほかならないが、早速に創刊の計画を立て促進して下さった編集委員会、とりわけ中心になっていただいた方々の労苦をねぎらいたい。

言語文化教育研究センターが創設されて、一番の仕事は、十全な研究環境の確保ということであった。言うまでもないことながら、私たちが日夜打ち込んでいる研究は、その公表を待って結実とみなされるべきものである。そのための研究紀要の発刊ということであった。今、その研究紀要は『言語と文化』として誕生しようとしている。ここに盛られた研究成果のラインアップは、印象深いというだけではなく、知と心を揺さぶり、また昂揚させるものである。

当然、私たち言語文化教育研究センターのスタッフは、各自がそれぞれの研究を進め、成果を公表し、その成果を基に、岩手県立大学の教育に当たる、ということ自らの責務と自覚している。今、各自がと言ったが、同時に、基本的には構成員全体の研究の推進の熱意の中でそれが展開されていくことを思い出しておく必要がある。そのような共同体的一体感の中で研究活動に携わるという意識を持つことこそ、『言語と文化』の母体である言語文化研究センターの存在意識を確認することである。

そしてまた、言語文化教育研究センターは、一つの側面においては、個別的な言語の枠を超えた研究組織でもあるので、その性格にふさわしい研究の産出もまた目指さなければならない。そうであるならば、岩手県立大学の教育を踏まえつつ、個人的であれ、チームとしてであれ、他大学との間の知的交流を推進する場として活用していくことも重要になってくるであろう。

創刊への意気込みが、今後の研究活動に向けてますます高まることを念じる次第である。